
メデタイ奴の言うことにや

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メデタイ奴の言うことにや

【Nコード】

N1947S

【作者名】

Rail

【あらすじ】

四月、とある料亭の厨房で年若い料理人があるものを料理しようとしたのだが？

よう、兄ちゃん。大丈夫かい？ 随分手が震えてるじゃねえか。
ひよつとして、あれかい？ 俺みたいな立派な鯛をさばくのは初めてかい？ 兄ちゃん若いもんな。ならしょうがねえや。誰だって初めての時は緊張するもんさ。

おや、その様子だともしかして、俺の声が聞こえてるんじゃないかねえか？

やっぱりそうか！

はあー、長生きはするもんだねえ。俺の声を聞く人間がいるとは思ってもみなかったよ。

いやいや、そんな化け物を見るような目で見ないでくれよ。逃げる必要なんてこれっぽっちもねえや。俺は至って普通の鯛だ。

え、普通の鯛は喋らない？

……まあそれはそれだよ。俺にだって事情はあるまあんだから。

へへ、事情が気になるだろ？ どうしても言うなら話してやらねえこともねえんだけどな。まな板の上の鯛なもの。あとは料理されて食われるだけの運命だしな。

ただ俺の口は回りが悪くってねえ。え、今でも十分回ってるって？ いやいや、こんなのはまだまだ錆び付いた車輪みたいなもんさ。けど日本酒の一杯でも引っかけりゃ、あつと驚くほど上手に喋れるって寸法さ。どうだい、兄ちゃん。ここ、厨房だろ。兄ちゃんの格好からすると日本料亭と見た。

あるだろ、大吟醸。な、頼むよ。一口だけ！ 一口だけでいいか

らさ！

……はああ、生き返るねえ。こんな良い酒を飲んだのは久しぶりだ。

なんだって？ 鯛は酒が好きなのかつて？

……いやね、ここだけの話、兄ちゃんだけに特別に教えることなんだがね、ちよいと耳を貸しておくれよ。

実はね、俺は昔、人間だったんだ。

信じてない顔だね。まあそう思う気持ちもわかる。人間が鯛になる、なんてそうそうない話だものね。

ここでちょっと俺が鯛になっちまったまでの経緯を聞いてくれよ。

俺は昔、ロクデナシだったのよ。

おつかあには冷たく当たるし浮気はする、機嫌が悪けりや娘殴つたし、おつかあがそれを庇えばおつかあを殴った。娘をなでたことすらなかった。

それでもおつかあが頑張ってくれたから娘も立派になって嫁に行くことになった。

娘婿の家がそりゃあいい家なんだよ。うちなんか比べ物になんねえくらいの立派な家だった。

両家の顔合わせですつつって呼ばれたんだけどな、その席も娘の

嫁ぎ先が用意してくれたもんで、そりゃあもう豪華な店でご馳走が並んでたんだ。

それを先方がいちいち説明してくれたんだよ。

これは二人の門出を祝つての紅白かまぼこです、これは錦の卵です、これは二人に子供がたくさんできるようにってんで数の子です、これは二人の人生が明るく見通せるようにってレンコンです、ってな風にな。

他にも伊勢海老だのアワビだの、滅多にお目にかかれねえようなもんがこれでもかってくらい出されたわけよ。

最初は適当に聞いてたんだが、そのうち嫌な気分になってきたんだよ。何しろこっちは貧乏人だろ、そんな贅を尽くした料理なんて食ったことがねえ。おっかあも娘もうつれしそうな顔するもんだから、俺が甲斐性なしなのを責められてるような気分になってむしろくしゃしてきたのさ。

で、極めつけが桜鯛だ。

兄ちゃんなら料理人だから当然知ってるわな。

桜の咲く時期に卵を産むために集まってくる真鯛のことさ。その時期になるとちょうど綺麗な桜色になってね、味も極上っていうめでたい縁起物の高級食材だ。

その活造りを女将が持つて来てさ、桜鯛のおつくりでございませう、なんて気色悪い声で言うわけだ。そんでもって娘の婿がさ、この顔合わせのために用意させました、なんて澄まし顔で言うんだよ。おっかあもおっかあで、こんな立派なもの、今まで食べたことありません！　なんてはしゃいじまってさ。

もうそれを聞いたらかあーってなって我慢が出来なくなって、何

が桜鯛だ、こんなろくでもねえ結婚、俺は認めねえぞ！　って怒鳴
っちまったんだ。するとおっかあが呆れ顔でね、この人は自分が桜
鯛を買う甲斐性がないからってひがんでるんですよ、なんて相手の
ご両親に言うわけだ。

そしたらますます腹がたって、いても立ってもいられなくなっち
まった。

で、ぐわしゃーんと桜鯛の活造りをひっくり返してね、それをわ
ざわざ踏んづけて料亭から飛び出しちゃったってわけさ。

そしたらよく晴れた日だったのに、急に雷が鳴ってね、食べ物を
粗末にするとはなんという罰あたりだ！　って爺さんの声がしたん
だ。

そこで気がつく、俺はまな板の上にいてね、目の前に包丁を研
いでる料理人がいたってわけさ。

わけがわからずわめいていたが、料理人には聞こえてないようで
ね、代わりにどこのだれとも知らねえ声が言うわけさ。

貴様が気持ちのこもった祝いの食べ物を粗末にした天罰だ、これ
から先お前は鯛として延々と人にさばかれ、食われ続けるのだ！
ってね。

そんな時から俺は鯛として料理されて食われて、そんでまた次の鯛
に乗り移ってまたさばかれて食われてってのを繰り返すことになっ
たわけだ。

それがどうしたことが、祝いの時に使われる桜鯛ばかりにね。

辛くなかったかって？

そりゃあ最初は辛かったよ。包丁で切られると痛いし、俺を食う

奴らはこっちの気も知らないで幸せそうな顔してやがんだからな。

でもな、何回かそうしているうちに気付くわけよ。

俺を食う奴らはみいんな幸せそうなんだ。

桜鯛だからさ、めでたい席に出されてるわけなんだよ。結婚式や見合い、卒業祝いやら就職祝い、果ては米寿やら白寿の祝いなんてのもあった。

祝いの席でさ、みんな楽しそうな顔なんだよ。

美味しい料理と美味しい酒、それに加えてめでたいことってんで、みんな幸せそうなんだ。

結婚式の席なんかだとさ、娘が嫁に行くってんでずっと泣くのをこらえてる父親もいたし、育ててくれてありがとうって泣く子供もいた。

みんな、感謝してるんだよ。祝ってるんだよ。めでたいことをさ。そこに行くまで支えてくれた人をさ。そんで一生懸命応援して、幸多き人生を願ってる。

ところが俺はどうだい？

子供にもおつかあにも、優しくした覚えがねえ。ひでえことしたしてなかった。

極めつけに、娘の結婚にケチつけて、めでてえ席を台無しにしちまった。

幸せそうに言祝ぐ奴らを見ると、つくづく自分が情けなくなつてよお。おつかあにも子供にも悪いことしちゃったって後悔してたんだ。

するとね、俺に罰当てた神様も思うところがあつたんだろうね。いつもみてえにさばかれたと思つたら、娘が目の前にどでーんと座つてたわけさ。綺麗な結婚装束着てさ。

そう、俺は娘の結婚式で出されたわけだ。

娘は活造りにされた俺見て、しくしく泣きだしてね、こう言うのさ。

この桜鯛を見ると、おつとを思い出す。おつとはロクデナシだった。飲む打つ買うでおつかあを泣かせて、殴つて、私を怒鳴つた、つて。

まさにその通りで、いや本当に情けねえ。父親を名乗るのもおこがましいほどだ。めでてえ席で口にするもんじゃねえよつて一人で落ち込みまつてね。

ところがどっこい、娘はこう続けたのさ。

けど、私が近所のガキ大将にいじめられてた時には頭から湯気が出るんじゃないかってくらい怒ってくれたおつとだった。私が迷子になったとき、真っ先に見つけてくれたのもおつとだった。死んじまつたおつとうは、あの世で私のことを祝ってくれるかしら、つてね。

だから俺は聞こえないだろうとは思つたけど、言つたのさ。

娘の幸せを願わねえ親なんているもんかい、不甲斐ない親で改心するのにえれえ時間がかかつちまつたけど、俺はお前の幸せを心の底から願つてゐるんだぞ、つて。

そしたら天に祈りが通じたのか、それまでしくしく泣いてた娘がはつとして顔をあげてね、おつとうの声が聞こえた、なんて言うんだよ。

それでもつて泣き笑いでね、ありがとう、ありがとうって言っただよ。婿さんも娘の背中撫でながらさ、必ず幸せにするから、天国

の義父さんに見てもらおう、幸せになろうって言うもんだから、娘がしまいにやわあわあ泣いちゃって、せっかくの化粧がドロドロになっちゃった。

でもまあ、幸せそうだったよ、うん。おつかあも、娘のそんな様子見て嬉しそうに泣いてたし。

そういので、俺の心残りもきれいさっぱりなくなっただけさ。

え、なんで未だに鯛なんだって？

さあねえ。何しろ天罰だから、俺に罰当てた神様の気が済むまでこのまんまじゃねえのか？ もしかしたら神様はこっちのことをすっかり忘れてるかもしれないねえがな。

別に俺は構わねえんだ。それでも気にいってんだよ、桜鯛。何しろ俺を見る奴みんな幸せそうなんだもん。こっちまで幸せになっくらあ。

さばかれる時は多少痛いが、なに、俺も男だ。それくらい耐えてやらあ。

ってなわけだからさ、兄ちゃんも上手に俺を料理してくれよ。俺を待ってる客がいるんだからな！

さ、ずばっと包丁入れてくれや！

「
　　というわれのある桜鯛です」

年若い料理人によつて活造りにされた桜鯛の身の上話を事細かに聞かされ、その上件の桜鯛と視線がばっちりあつてしまった客は、非常に食べづらかつたという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1947s/>

メデタイ奴の言うことにや

2011年4月5日05時17分発行